

# 宮古・池間島のカツオ産業文化誌（１）

## －近現代における池間島カツオ産業史の整理と検討－

若林良和（愛媛大学副学長・南予水産研究センター教授）

川上哲也（池間文化協会会長・愛媛大学大学院連合農学研究科特定研究員）

### 1. はじめに

「さおが曲がる かつおが空で 鳥になる」

これは、1989(昭和64・平成元)年の「平成元年度一茶まつり全国小中学生俳句大会」において、池間中学校の親泊裕之さんが特選を受賞した俳句である。カツオと鰹節は、黒砂糖や上布と並んで宮古地域の三大特産品であり、地域の産業基盤を形成し地域経済を潤してきた。宮古地域において、池間島は、伊良部島（佐良浜）とともに、カツオ産業（カツオ一本釣り漁業と鰹節製造業）の隆盛を誇った地域である。

筆者らは、今後、池間島のカツオ産業文化に着目して、歴史学・民俗学・社会学・地理学など学際的な視点から総合的に究明していくことにしている。その研究成果は、これから本紀要で連載をしていく予定である。したがって、本稿は、その第1弾と位置付けられ、池間島のカツオ産業を地域史の視点から整理し、その特性を把握しようとするものである。<sup>1)</sup> 具体的には、市町村史や各種の史誌・略史、伝記、それに、記念誌、民俗誌、生活誌など宮古地域に関する史資料を再構成してカツオ産業の年譜を作成した上で、池間島という地域の近現代産業史の軌跡について筆者らが俯瞰して、その特性を明らかにすることが本稿の目的である。<sup>2)</sup>

### 2. カツオ産業の年譜

本稿では、宮古地域の池間島を中心に据えて、他地域との関連性も視野に入れながら、明治後期から平成期までの約100年間に及ぶカツオ一本釣り漁業と鰹節製造業の盛衰を取りまとめて列挙する。

1906(明治39)年

\*鹿児島県出身の鮫島幸兵衛（平良間切り在住の商人）が、宮古地域で最初となるカツオ一本釣り漁業を開始した。鮫島はカツオ漁船（帆船）2隻を宮崎県から導入し、狩俣を拠点に池間島沖でカツオ一本釣り漁業に着手した。ここでは、鹿児島県と宮崎県の漁民が漁撈を行ない、地元の伊良波捨市らは一本釣り用の活餌採取係に雇用された。

1907(明治40)年

\*池間島の漁民が、鮫島幸兵衛よりカツオ漁船1隻「漁龍丸」を購入して、自前によるカ

ツオ一本釣り漁業を開始した。

1908(明治41)年

\*池間島の漁民が共同出資で、鮫島幸兵衛よりカツオ漁船2隻を購入した。それらの漁船は「山下丸」「朝日丸」と命名された。

\*宮崎県の漁民がカツオ一本釣り漁業に従事するために、池間島へ来島した。

1909(明治42)年

\*池間島でカツオ生産組合が組織されてカツオ漁船(帆船)6隻を購入するとともに、鰹節製造工場も設けられて鰹節が造られ始めた。

\*宮崎県からカツオ漁船4隻が回航された。

\*伊良部島(佐良浜)でカツオ漁船2隻がカツオ一本釣り漁業を開始した。

1910(明治43)年

\*池間島の漁民が共同出資で、鮫島幸兵衛よりカツオ漁船4隻を購入した。その結果、池間島では、1908(明治41)年に購入したカツオ漁船2隻と合計6隻となり、沖縄県から派遣された指導員のもとでカツオ一本釣り漁業が本格化した。

\*カツオ一本釣りとともに、鰹節製造の指導員も沖縄県から派遣された。

\*カツオ一本釣りや鰹節製造の賃金として1人当たり50~60円が支給された。(当時、米1俵(6斗)5円、酒1合1.5銭であった。)

\*池間島の漁民である長嶺真津が、沖縄県漁業鑑札(漁業許可証)を取得し、カツオの活餌取りや追い込み網漁に従事した。

\*池間漁業協同組合の設立が沖縄県に認可された。(八重干瀬の慣行による専用漁業権(20年間)を取得するために、1904(明治37)年に任意組合として池間漁業協同組合が創立された。初代組合長は松川利勇であった。)(写真1参照)



写真1：池間漁業協同組合の事務所

(資料提供：池間島・前里元長寿会「前里村創建250年記念アーカイブ」)

\*沖縄県内のカツオ漁船は総計84隻(内訳は那覇24隻、島尻郡5隻、中頭郡1隻、国頭

郡 29 隻、座間味 15 隻、久米島 2 隻、渡嘉敷島 2 隻 宮古郡 11 隻、八重山郡 16 隻) に達した。

1911(明治 44)年

- \* 池間島のカツオ漁船では、組合の組織化が進んだ。
- \* 「宝山丸」「重宝丸」「山下丸」のカツオ漁船 3 隻が動力化した。
- \* 愛媛県から技術者が招かれ、池間島の漁民は機械の操作技術を習得した。
- \* 新潟県の池貝鉄工所へ技術習得のために、池間島の漁民が派遣された。
- \* 愛媛県のカツオ削り女工が、鰹節製造の経営者に伴われて続々と来島した。

1912(明治 45・大正元)年

- \* 1 隻あたりの漁獲高が前年比で平均 547 尾増となり、池間島のカツオ漁船 6 隻の総水揚げ量は 9,830 尾に達した。
- \* 「機関士は、洋服つけて靴はいて歩く姿は良けれども、顔は油で真っ黒けのけ」という替歌が池間島でも流行した。

1913(大正 2)年

- \* 動力を付けたカツオ漁船が 6 隻となり、組合の組織化も完了した。

1914(大正 3)年

- \* 伊良部島で佐良浜漁業組合の設立が県に認可されたが、その後、間もなく、解散した。

1915(大正 4)年

- \* 仲間屋真が松川利勇とともに鰹節の販路拡張のために大阪へ出かけた。
- \* 仲間屋真は、翁長春福や与座金と共同出資による缶詰工場を設立したが、ハンダ付けなどに失敗したために事業を停止した。
- \* 池間漁業協同組合の初代組合長であった松川利勇が辞任し、仲間屋真(27 歳)が 2 代組合長に就任した。
- \* カツオ一本釣り漁業が盛況となり、池間島の子供たちは小学校を卒業後、1~2 年間、網漁業などに従事した後、カツオ漁船に乗り込むことが多くなった。そうした子供たちは、数年後に一人前となって無条件で組合に入会した。
- \* 池間島のカツオ漁船 6 隻が鰹節製造工場を経営した。
- \* 池間島で最初の煉瓦造りの焙乾室が新築された。
- \* 池間島の鰹節製造工場では、煮釜が改良されたほか、燃料が薪から石炭に変わった。
- \* 鰹節製造の労働力不足が顕著となり、池間島では、鰹節削り女工養成計画が立てられるとともに、漁業協同組合主催で初心者女性らへ新たに鰹節製造の指導が行われた。

1916(大正 5)年

- \* 池間漁業組合の組合長である仲間屋真(28 歳)が村会議員に当選した。

\* 沖縄県漁業協同組合連合会が設立された。

\* 四国の中川米次が仲間越に機関修理工場を設けて経営を始めた。この工場は 1935 (昭和 10) 年頃まで存続した。

1918(大正 7)年

\* 鰹節の需要が高まったために、1人当たりの給与(1漁期:3か月)が800円に及んだ。(当時、教員の年間給与は300円であった。)

\* 好景気を反映して、池間島のカツオ一本釣り漁業は、沖縄の他市町村を圧倒するほど好況を呈した。また、鰹節が値上がりして1隻当たりの生産額は800円を突破した。それで、池間島にあった茅葺きの家屋が一掃されるとともに、平良の料亭も繁盛した。

\* 池間漁業協同組合は仲間屋真組合長(常任)ほか、幸地良忠が事務担当した。

\* 池間島のカツオ漁船6隻(「宝山丸」「漁福丸」「重宝丸」「大宝丸」「池島丸」「宝泉丸」の6組合)の間で漁獲競争が激化し、「カツオの池間島」という評判が高まった。

1919(大正 8)年

\* 宮古全域に「コレラ」が発生し島を閉鎖した。池間島では、1人も罹病者はいなかった。これはカツオ一本釣り漁業による経済力が高まり、自立性のある社会基盤が備わったことによるものとされた。(宮古地域の罹病者は2000人あまりで、死者900人に達した。)

1921(大正 10)年

\* 狩俣や大神、西原、伊良部(佐良浜)の人達が来島してカツオ一本釣り漁業に従事した。

\* 宮里が宮古商會を設立し、漁具や燃油、食料品の販売、鰹節の売買などを広く手掛けた。この商店は戦時中まで存続した。

1922(大正 11)年

\* 沖縄県のカツオ漁船数は、89隻に及び、その後、1923(大正 12)年に149隻に、1924(大正 13)年に175隻と激増した。その後、1937(昭和 12)年には、活餌の不足や狭小な漁場、南方出稼ぎの続出によって、沖縄県のカツオ漁船は62隻と大幅に減少した。

\* 宮古郡水産会が設立された。

1923(大正 12)年

\* 世界大恐慌のために、国内外のカツオ一本釣り漁業や鰹節製造業にも影響が出た。

\* 漁業協同組合設立20周年記念式典(組合員280名参加)が開催され、宮古(池間島)のカツオ一本釣り漁業創始者である鮫島幸兵衛ほか4氏に賞状と銀杯が授与された。

1924(大正 13)年

\* 沖縄県のカツオ漁船数は149隻に達した。

\* 池間島のカツオ漁船に散水器が設置され、漁獲効率が上がった。(沖縄県では、1918(大

正 7) 年に設置された。)

\* 平良村が町に昇格し、仲間屋真も町会議員 (在職 16 年間) となった。

1925(大正 14)年

\* イーヌブー (入江) の干拓事業が 5 月に着工された。(事業は 1934 (昭和 9) 年に完了した。)

1927(昭和 2)年

\* 池間女子青年団が鯉節削り大会に参加した。

1928(昭和 3)年

\* 仲間越の船溜場施設事業が公的補助金を受けて開始された。

1929(昭和 4)年

\* 第 1 次南方基地漁業 (カツオ一本釣り漁業と追込み漁業の分業制) が始まり、その後、飛躍的に発展した。池間島の青年漁民 7 名 (勝連敏夫、仲間貞栄、与那覇勝米、前泊徳正、新城増蔵、川上金四郎、新城金次郎) が、カツオの活餌取りの技術者として北ボルネオへ派遣された。当時、ボルネオ行きの漁業者の月給は 50 円であった。カツオ漁船 2 隻「宝泉丸」「久松丸」が出発し、仲間貞夫組合長が神戸まで一行を引率した。

1930(昭和 5)年

\* 大型のカツオ漁船「宝丸」が建造された。

\* 組合制度がなくなり、親方制度へと変更された。

\* 第 1 回鯉節削り競技大会 (平良) で、池間島の勝連節子 (19 歳) が一等賞となった。

\* 伊良部島 (佐良浜) の漁民との間で、漁業権をめぐる騒動が頻発した。

\* 八重干瀬の専用漁業権が期間満了 (20 年間) となったが、再び、地先水面専用漁業権の免許が更新された。それで、池間島をあげて慶祝の行事が実施された。

1931(昭和 6)年

\* 「根剛丸」が漁民 (釣手) 33 人と鯉節女工 4 人を乗せてトラック島へ出航した。

\* 「宝丸」が漁民ら 46 人を乗せてパラオ諸島へ出航した。

1932(昭和 7)年

\* 「幸安丸」と「弥栄丸」が漁民ら 72 人を乗せてポナペに出航した。

\* 鯉節価格が下落したために、池間島民の出稼ぎが増加した。

\* 「第 2 重宝丸」が台湾付近で遭難し、行方不明者は 15 人に達した。

\* 仲間越漁港の構築が開始された。(工期は 1934 (昭和 9) 年まで)

1933(昭和 8)年

\* 南方地域のサイパン島、ポナペ島、パラオ諸島へ家族ぐるみで移住し、カツオ一本釣り漁業と鯉節製造業に従事した。

\* 漁業組合が出資制度を導入した。

1934(昭和9)年

\* 仲間越の船溜場改修工事が完成した。(1959(昭和34)年の台風で崩壊した。)

\* カツオ一本釣り漁業の隆盛により、島の生活が華美となった。たとえば、平良から衣装の出張販売により、正月、7月、8月の行事では他地域の人々を驚かすような服装を着用していた。そのほか、学校教師に対する軽視や侮辱も表面化した。

\* 組合を結成して、大型カツオ漁船を所有するようになった。

1935(昭和10)年

\* 老若男女が旧暦3月3日に八重千瀬への浜下りを開始した。

\* 八重千瀬の漁業権紛争が起こった。池間島と伊良部島の間で、八重千瀬の専用漁業権(1910(明治43)年に池前漁業組合が取得)の入漁料をめぐる紛争が発生した。池間島の漁民は監視船を出して漁獲物を容赦なく取り上げるなど厳しい対応をしたために、伊良部島の漁民が激昂して「池間丸」を襲撃し負傷者が出た。

1936(昭和11)年

\* 漁業組合主催で、鰹節削り競技会が開催された。

\* 池間漁業協同組合に組織変更がされ、出資証券(30円)が発行された。

\* 本組合は組合員数371名、漁船数11隻で、組合長が仲間貞夫から平良勇吉に交代した。

\* 「宝泉丸」(31名乗船)と「漁法丸」(30名乗船)が北ボルネオのシミアル島へ出漁し、カツオ一本釣り漁業を開始した。

1937(昭和12)年

\* 定期連絡船「池間丸」(19,27トン、焼玉50馬力)が新造され就航した。

\* 「瑞光丸」(30名乗船)がボルネオ島へ出漁しカツオ一本釣り漁業を開始するとともに、池間島の婦女が鰹節女工として英領北ボルネオへ渡航した。

\* 日支事変で燃料が不足し兵役者が続出して、出漁できないカツオ漁船が出てきた。(写真2参照)



写真2：戦前の鰹節製造工場(1938(昭和13)年ごろ)

(資料提供：池間島・前里元長寿会「前里村創建250年記念アーカイブ」)

1938(昭和 13)年

\*「宝泉丸」がボルネオへ渡航した。

1939(昭和 14)年

\*「瑞光丸」がボルネオから帰島した。

1940(昭和 15)年

\*池間島灯台が点灯された。

\*平良～伊良部の定期連絡船「伊良部丸」が遭難した。

1941(昭和 16)年

\*南方出稼ぎ者が続々と帰島した。

1942(昭和 17)年

\*特務艦「柏丸」が池間島沖に碇泊した。

1943(昭和 18)年

\*水産団体法によって、漁業協同組合が漁業会と組織替えをした。(1954(昭和 29)年に解散した)。

1944(昭和 19)年

\*カツオ漁船 6 隻が石油運搬のために北ボルネオへ出航した。

1946(昭和 21)年

\*疎開先から池間島の人たちが続々と引き揚げ、「池間丸」が食料調達のために与那国島との間を往復した。

\*宮古水産会(後に宮古水産組合連合会(宮古水連)と改称)が設立された。

1947(昭和 22)年

\*池間島に機関修理工場が設置された。

1950(昭和 25)年

\*米民政府からガリレオ資金で、カツオ漁船が建造され、沖縄県下のカツオ漁船数は 120 隻に達した。

\*台風エンシーの襲来で「大本丸」が遭難したが、「瑞光丸」によって乗組員全員が救助された。定期連絡船「池間丸」は荷川取の浜辺に緊急接岸し難を逃れた。

\*池間島と狩俣間の連絡船「宝来丸」に 3 馬力の焼玉エンジンが搭載された。

1951(昭和 26)年

\*米国民政府の布令で、池間漁業協同組合が認可された。

1952(昭和 27)年

\*「宝来丸」を「黄金(こがね)丸」と改名した。

\* 第 2 回全琉水産大会で水産功労者と漁獲優秀船が表彰された。

\* 琉球政府の助成で、池間漁業協同組合に共同販売所が建設された。

1954(昭和 29)年

\* 池間島のカツオ漁獲量は 23 万斤余を記録した。

1955(昭和 30)年

\* 宮古のカツオ漁船が 22 隻 (池間島 14 隻、伊良部島 7 隻、久松 1 隻) となった。また、伊良部島 (佐良浜) では、カツオ一本釣りと活餌取りの分業体制が確立された。(写真 3 参照)



写真 3 : 昭和 30 年代のカツオ漁船 (ハーリーの時期のもの)

(資料提供 : 池間島・前里元長寿会「前里村創建 250 年記念アーカイブ」)

1957(昭和 32)年

\* フディ灯台が点灯された。

\* 定期連絡船「池間丸」(29,36 トン、焼玉 75 馬力) が新造されて就航した。(写真 4 参照)



写真 4 : 昭和 30 年代の定期連絡船「池間丸」

(資料提供 : 池間島・前里元長寿会「前里村創建 250 年記念アーカイブ」)

\* 農林漁業中央金庫で漁船建造の特別融資が実施され、「黄金丸」(2,5 トン、5 馬力) が新造された。

1958(昭和 33)年

\*池間漁港内にドック場、スキンマ舟揚げ場が設置された。

\*カツオ漁船の各船主がブロック造の池間共同加工場を完成させた。(写真 5 参照)



写真 5 : 昭和 30 年代の共同加工場 (鯉節製造工場)

(資料提供 : 池間島・前里元長寿会「前里村創建 250 年記念アーカイブ」)

1959(昭和 34)年

\*カツオの異常大漁(1 隻あたりの 40 万斤漁獲)となったために、加工製造ができず、カツオはやむなく、畑の肥料に転用された。

\*池間漁業協同組合の傘下にあるカツオ漁船とその船主は以下の 14 隻であった。

瑞光丸 (仲間勇栄)	重宝丸 (糸満金三郎)	振隆丸 (糸満金三郎)
宝山丸 (玉寄正雄)	照幸丸 (与座金真)	雄山丸 (前川義雄)
晃生丸 (武富盛市)	成山丸 (松川トシ)	克栄丸 (与那覇勝栄)
有芳丸 (本村正市)	泰光丸 (仲間正雄)	伸光丸 (仲間勇栄)
伸成丸 (松川勝次郎)	宝洋丸 (マグロ延縄漁船、長嶺金五郎)	

\*第一宮古島台風(サラ台風)の直撃により、仲間越の防波堤が崩壊したが、琉球政府の助成で翌年に復旧した。

1960(昭和 35)年

\*宮古でサンゴ漁業が始まり、急きょ、カツオ漁船が代用された。

\*干魃による飲料水不足のために、「振隆丸」が平良から飲料水を運搬した。

\*カツオ一本釣り漁業が不漁となったために、鯉節の価格が暴騰した。

1961(昭和 36)年

\*女性の船主が未就学児童を対象にした池間保育所の経営に着手した。

\*池間漁港が、佐良浜漁港や久松漁港とともに、第一種漁港に指定された。(沖縄県内で 7 漁港が指定された。)

\*池間漁業協同組合によって、「池間丸」(27トン)が1日1往復、就航した。運賃は2等10セント、1等12セントであった。この連絡船は郵便や新聞、映画フィルム、鰹節、鮮魚などを輸送した。

\*池間島～狩俣の間を定期連絡船「黄金丸」が毎日1回15分で運航した。

\*鰹節製造工場は、(光) (栄) (大) (中) (池) (光) (八) (ヨ) (山) の9工場であった。

1962(昭和37)年

\*南方での鰹節製造が盛んになり、そのリーダーとして小禄治世と与儀定吉が派遣された。

\*「初音丸」船主の上里清太郎がバカジャグガニ(餌採取法)で敷き網を開発した。

\*「吉進丸」の伊良波進が現在の袋網(6～8名)で活餌捕りを開始した。

1964(昭和39)年

\*池間漁港は避難港として、浚渫整備事業が開始された。

1965(昭和40)年

\*池間漁港の第2期工事起工式が行われた。

1966(昭和41)年

\*池間漁協婦人会が発足した。

1967(昭和42)年

\*定期連絡船「池間丸」(38,37トン、150馬力)が新造されて就航した。

\*「雄山丸」(池間漁協の船籍)が石垣島の中学3年生を救助した。

1970(昭和45)年

\*第2次南方基地漁業が開始された。池間島からカツオ漁船3隻、伊良部島からカツオ漁船2隻が、パラオ諸島やパプアニューギニアのラバウルへ出漁した。(写真6参照)



写真6：戦後のカツオ漁船(資料提供：山城信吾)

1974(昭和49)年

\*南方出漁漁船団の漁民700人がソロモン諸島、パプアニューギニアのラバウルなどに向

けて出発した。

\*カツオ漁船は木造船から FPR 船となり、池間島周辺のリーフに航路標柱が設置された。

1975(昭和 50)年

\*池間漁協の共同利用施設が完成し、祝賀会が開催された。

\*池間漁協婦人会が海神祭でハーリー（爬竜舟競漕）に参加した。

\*カツオ漁船団 43 隻が南方地域へ出発した。

\*台湾を基地とするカツオ一本釣り漁業に着手したが、失敗した。

1976(昭和 51)年

\*南方基地カツオ漁業の漁獲が一隻当たり 20 万トンと大漁になった。

1978(昭和 53)年

\*南方基地カツオ漁業に宮古の漁民 700 名あまりが従事して最盛期を迎える一方、地元の池間島など宮古自体のカツオ一本釣り漁業は衰退した。

1980(昭和 55)年

\*池間島～平良間をフェリー「なかと」が就航した。

1981(昭和 56)年

\*世界の経済不況によるカツオ魚価の低迷で経営が悪化したために、パプアニューギニアの南方カツオ漁業基地が閉鎖され、池間島など宮古の多くの漁民は失職した。

\*フェリー「なかと」が「池間丸」と改名した。

\*6年ぶりに新造のカツオ漁船「宝幸丸」「宝山丸」が進水した。

1982(昭和 57)年

\*伊良部島（佐良浜）の漁民がパヤオ（人工浮き魚礁）を設置し、カツオのほかキハダマ、グロなどが多獲された。

\*池間島沖でのカツオの回遊は少なく、カツオ群も小さくなった。

1983(昭和 58)年

\*池間漁港が開港し、式典と祝賀会が実施された。（1972（昭和 47）年から 1981（昭和 56）年まで 10 年間の投資額は約 18.9 億円に達した。）

1984(昭和 59)年

\*池間島漁民センターが落成した。

1986(昭和 61)年

\*池間漁港の第 2 防波堤灯台が点灯した。

\*池間大橋の橋梁設備工事起工式が実施される一方で、池間島離島振興総合センターが落成した。

1988(昭和 63)年

\* 池間中学校が「一茶まつり全国小中学生俳句大会」において団体賞受賞と入選者 8 名が表彰された。

1989(昭和 64・平成元)年

\* 「一茶まつり全国小中学生俳句大会」で、池間中学校の親泊裕之が「さおが曲がる かつおが空で 鳥になる」で特選を受賞した。

1990(平成 2)年

\* 池間中学校の校庭に、「一茶まつり全国小中学生俳句大会」の記念碑（団体賞受賞・特選俳句）が建立された。（写真 7 参照）



写真 7：池間中学校の校庭に設置された特選受賞記念碑（1990（平成 2）年）（資料提供：川上哲也）

1992(平成 4)年

\* 池間漁協と池間自治会の主催で、「池間丸・黄金丸」のお別れ感謝会を実施した。

\* 池間大橋が開通した。（総事業費は 99 億円に達した。山城金福、与那原長太郎夫妻らが親子三代の渡り初めを行ない、また、漁民らによる海上パレードが実施された。）

1995(平成 7)年

\* 池間中学校の生徒たちがカツオ一本釣り漁業の体験学習を行った。（男子生徒 16 人はカツオ漁船「吉進丸」「宝幸丸」「八幸丸」に分乗して一本釣り体験し、女子生徒 15 人は鰹節製造工場の丸吉工場、丸満工場、丸良工場で製造体験を行なった。

\* 第 1 回宮古地区初任者研修会を実施した。（男性教員はカツオ一本釣り漁業体験、女性教員は鰹節製造体験）。

1996(平成 8)年

\* 第 2 回宮古地区初任者研修会が実施された。

1997(平成 9)年

\* 第 3 回宮古地区初任者研修会が実施された。（男性教員 5 名と女性教員 5 名がカツオ一本釣り漁業を、女性教員 4 名が鰹節製造をそれぞれ体験した。女性教員もカツオ一本釣り漁業体験に参加した。）

\* 第 1 回かつお感謝まつりが開催された。

2005(平成 17)年

\*NPO 法人いけま福祉支援センター（前泊博美理事長）が水浜広場で「かつお祭り」を開催した。

\*池間漁協女性部「母ちゃんたちの市場」が海と陸の幸を販売して好評を博した。

2006(平成 18)年

\*池間島においてカツオ一本釣り漁業と鰹節製造業が完全に休業した。

2011(平成 23)年

\*第 1 次宮古島市水産振興基本計画が策定された。

2012(平成 24)年

\*「第 3 回 2012 カツオフォーラム in 宮古島」（同実行委員会（下地敏彦市長）と日本カツオ学会（若林良和会長）が主催）が開催された。

### 3. おわりに

池間島では、カツオ一本釣り漁業の開始以前に、カツオは神の使いとして崇められ、捕ることはおろか、食べることもできなかったという伝承も残っている。それだけに、池間島におけるカツオは、精神的にも、社会的にも、経済的にも、そして、地域的にも極めて重要な価値を持っている。明治後期になると、カツオの産業化が進められることになり、池間島におけるカツオの価値と意義は大きくなっていった。本稿の暫定的な総括として、池間島に見られる近現代カツオ産業史の特性には、次の 6 点を指摘しておきたい。

- ①池間島のカツオ産業に関する盛衰過程が今回の整理から明らかになった。カツオ・鰹節は、明治期～大正期～昭和後期にわたって宮古の三大特産品として、地域経済振興の重要な使命を果たしてきた。だが、「カツオの池間島」と称賛されたカツオ産業は 1975（昭和 50）年代後半より衰退期に入り、100 年でその幕を閉じることになった。
- ②池間島のカツオ産業は、着業当初の明治後期、漁業資本が脆弱であったために共同出資の方式をとった。また、技術的な後進性も色濃く、カツオ一本釣り業では鹿児島県や宮崎県から、そして、鰹節製造業では愛媛県から、それぞれ技術指導を受けた。そして、関係者は、カツオ産業の有望性と将来性を信じ、不断の精励によって漁法と製造法の技術を習得した。その結果、カツオの漁獲や鰹節の生産が着実に向上し、徐々に資本力を高めて大正 10 年代（1921～1924 年）には戦前の最盛期となって、カツオ産業の黄金期を迎えた。
- ③カツオの漁獲も、鰹節の価格も、ともに不安定な状況下であり、大漁による肥料への転用、カツオ資源の小型化と減少、パヤオによる集魚、鰹節取引価格の暴落と低迷など、資源の不確実性、価格の変動性がつきまどってきた。そして、池間島の漁民は経営的に打撃を受けて、それらの要因に翻弄されてきた。
- ④近代の沖縄県におけるカツオ産業は、座間味村に続いて、池間島で展開されることになった。その経営体制として、カツオの漁獲と鰹節の製造が一体化した組合方式であり、小規模ながら一船一工場の形態を保持したことが特徴的である。
- ⑤池間島の漁民は、通史的に見ても、伊良部島（佐良浜）の漁民とともに宮古のカツオ産業の担い手として双璧を成していることが明白である。戦前には、双方の間で八重干瀬の漁業権紛争が生じたこともあったが、彼らは沖縄県を代表する海洋民族であり

漁撈民族でもある。

⑤池間島の漁民は、戦前から戦後を通じて、ボルネオ島やパラオ諸島、パプアニューギニア、ソロモン諸島など南方基地カツオ漁業（戦前の第1期、戦後の第2期）の中核的な役割を果たした。特に、家族ぐるみで南方基地へ渡航した例もみられ、卓越したカツオの漁撈技術と製造技術を用いて、南洋節の生産が推進され、日本本土にも集荷されるほどの隆盛を極めた。他方、国際情勢のなかで、撤退を余儀なくされ、大量の失業が発生するなど危機的な状況に陥ることも多々あった。

⑥池間島では、近年にカツオ産業が完全に廃業となるなかで、宮古島市として総合的な水産振興と漁村活性化を図る必要があった。それで、カツオを地域の価値ある歴史的・文化的な資源として位置付け直して、新たな価値創造や意義付与につながる取り組みも、少しずつ展開されている。

以上のような、今回の概括的な全体像の把握を踏まえた上で、筆者らは今後、池間島のカツオ産業文化を探求することにしたい。周到な文献の渉猟と整理、フィールドワークの成果をもとに、カツオ産業とカツオ文化に関する学際的なアプローチで分析を試みることにし、本紀要に続編を準備する予定である。

## 注

- 1) 本稿作成の役割分担としては、まず、川上が原資料をまとめ、次に、若林はその年譜を本稿の主旨にしたがって全面的に加除して整理した。
- 2) 年譜の作成に利用・参考した文献は、以下に示した27件である。

## 文献（年譜の作成に利用・参考した文献）

- 池間小学校『100周年記念誌』池間小学校、2004年  
伊良波ひろし『池間島からの視点 ～ミヤークツツ・カツオ漁業を中心に～』だしきや企画、2013年  
伊良部村史編さん委員会『伊良部村史』伊良部村、1978年  
上里武・本村満『島に生きて ～奇跡をみた男たち～』私家版、2005年  
大井浩太郎『池間嶋史誌』南西印刷、1984年  
川上哲也『仲原壮一郎と池間島』私家版、1989年  
川上哲也『んすむら』私家版、2001年  
川上哲也『たまうつ先生』文芸社、2003年  
川上哲也『カツオ万歳』沖縄自分史センター、2007年  
川島秀一『カツオ漁』法政大学出版局、2005年  
城辺町史編さん委員会『城辺町史 別巻宮古史年表』城辺町、2005年  
平良市『ひらら 市制施行40周年記念誌』平良市、1987年  
平良市『きらきらひらら 市制施行50周年記念誌』平良市、1997年  
平良市教育委員会『平良市史 第7巻 民俗』平良市、1987年  
平良新弘『海人の島』印刷センターよなみね、2002年  
望月雅彦『ボルネオに渡った沖縄の漁夫と女工』ヤシの実ブックス、2007年  
森田真弘『仲間屋真小伝 ～池間漁業略史～』内外水産研究所、1961年

宮古地区市町村教育委員会『かつお（宮古地区初任者研修会）』平良市、1996～1998年  
仲宗根將二『宮古風土記』ひるぎ社、1988年  
仲間井佐六『伊良部町漁業史 ～パヤオ発祥の地～』佐良浜印刷、2000年  
仲間明典『佐良浜漁師達の南方鰹漁の軌跡』地域おこし研究社、2012年  
2012 カツオフォーラム in 宮古島実行委員会『2012 カツオフォーラム in 宮古島 報告書』  
2012 カツオフォーラム in 宮古島委員会、2013年  
野口武徳『沖縄池間島民俗誌』未来社、1972年  
若林良和『カツオ一本釣り』中央公論社（中公新書）、1991年  
若林良和『水産社会論』御茶の水書房、2000年  
若林良和『カツオの産業と文化』成山堂書店、2004年  
若林良和『カツオと日本社会』筑波書房、2009年

